

2025 年 10 月 17 日

報道機関各位

学校法人 塚本学院

大阪芸術大学

創立 80 周年記念 大阪芸術大学芸術劇場 緞帳リニューアル

学校法人塚本学院 80 周年記念事業の一環として、大阪芸術大学芸術劇場の緞帳が新調されました。日本画家であり、本学の美術学科長/教授である村居正之先生が原画を描きおろし、スケール大きく織り上げられた緞帳が装い新たに劇場を飾っています。



■村居正之美術学科長の原画が大スケールの緞帳に

原画を担当した村居正之美術学科長は、長く日本画の道を追究し、40～50 代より取り組んできた天然の岩石から自作する絵の具を使い青の濃淡でギリシャの風景を描いた作品群が「青の墨絵」と称されています。

優れた芸術活動を表彰する日本芸術院で、2019 年度日本芸術院賞と、特に高い業績が認められた人に贈られる恩賜賞を受賞。2020 年には日本芸術院第一部（美術）第一分科（日本画）第一部会員に任命されています。

今回の原画「STAR」は第 9 回日展にも出品された作品でもあり、星夜にアクロポリスが浮かびあがる風景が描かれています。

■星夜のアクロポリスが浮かび上がる原画のタイトルは「STAR」

「STAR」とは遺跡の上で燦然と輝く星たちを表し、大阪芸術大学の芸術劇場からスターが続々と羽ばたいていくようにという願いを込めて描かれました。

その原画を京都の織物メーカー川島織物セルコンが伝統の織技術によって幅 16.5m×高さ 10.5mの緞帳へと織り上げました。劇場でライティングが施されると、重厚感ある遺跡が立ち上がり、星夜にギリシャの円形劇場からアクロポリスを臨んでいるかのよう。



芸術劇場の新しい顔「STAR」

■日本画を織物に。緞帳への初めての挑戦

<村居正之美術学科長の談話>

先ほど初めて芸術劇場に設置された緞帳と対面し、とても感動しました。完成品を床に広げたものはすでに確認していたのですが、置いてあるものと吊るしたものでは、こんなに違うのかと驚いています。

3年ほど前に塚本邦彦学長から創立 80 周年記念に緞帳を変えるので、原画を描いてくださいと依頼があり、大変光栄なことだと引き受けました。若いころから壁画や版画など様々なことを行ってきましたが、緞帳は初めての挑戦でした。生涯にこのようなチャンスに恵まれたことに感謝しています。

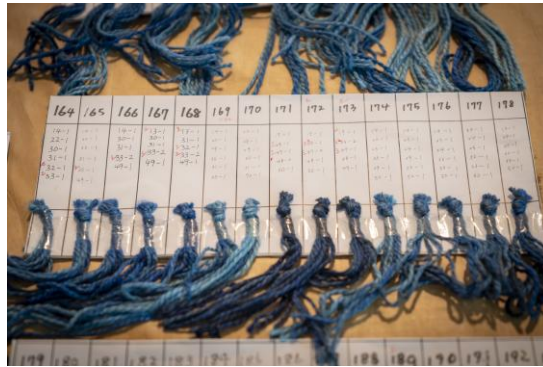
テーマを選ぶにあたり、自分が描いてきたギリシャの文明には現代文明に通じる要素が詰まっているので、大学の劇場という場所でそれを描いていこうと決めました。

ただ、最初は日本画を緞帳にするということで、果たして私の個性である群青色でできるのかと不安がありました。絵の表現は自由で、色を作り思うように筆を運べますが、それを織物に置き換えて表現するというのは、大きな制限を加えるということです。ましてや青系統だけで行うというのですから、制限が強すぎて成立するのにか心配でした。

川島織物セルコンは群青の濃淡のために、約 300 色もの色糸を準備し、全体の雰囲気を考えてくださいました。できるだけ原画に近い色でという思いが伝わってよかったなと思います。図録などを作るときに印刷関係の方から「(原画のように) 色が出ない」とよくいわれるのですが、「それがすぐにできたら高価な天然の顔料ではなくインクを使いますよ」と冗談で返します。それくらい難しいものなのです。



緞帳で次世代へと思いをつなぐ。「師の池田遙邨先生や諸先輩からの教えがあったから今日の自分があると思います。学生たちにもいずれ何かの折に分かってもらえたらいいな、と若い時に聞いた師匠らの言葉を伝えています」



糸見本。繊細な染めと糸の組み合わせで、
村居先生の青の世界を織り上げる

現場で原画を伸ばして展開した図面から配色して形に起こしていくところを見学したときに、1本1本でいねいに「ここにはこの糸を置いて」と試行錯誤をされているシーンを見て、ご苦労をかけているなと感じました。

夜空のブルーも1色ではなく濃淡で表現しているのですが、それを織りにするのは大変だったと思います。日本画というのは下地の色が大事で、最終的な色まで遠回りしながらゴールに近づくように仕事をします。この原画も最初は褐色から入っています。大きな作品はすべてそのステップを経ているので、川島織物セルコンへもそういったことを伝えて、グラデーションには糸にも赤系の糸を混ぜていただくなど工夫していただいています。

緞帳の星は原画ではここまで強く表現していないのですが、ライトアップした舞台で目にするために、こちら先方も相談しながら強めに輝きを持たせました。



きらめく星の瞬きに未来のスターが生まれて欲しいという
願いをこめて

私にとって、これほど大きな画面は初めてでしたので、制作を進める途中は、できあがりが見えるのか想像がつかみませんでした。しかし織りあがった完成品を目にした瞬間「ああ形になったな」と安堵の気持ちが沸いてきました。川島織物セルコンに「難しかったけれどもいい経験をさせていただいた」と言っていたいたのもありがたかったです。制作に関わってくださった方々に深く感謝します。

川島織物セルコンの製織チームは若手とベテランのスタッフがペアになって技術の継承を行っていました。芸術の技術や伝統を次世代へ繋ぐという思いは、私がお阪芸術大学で学生に伝えたい思いと同じです。今回の緞帳の制作で、織物の世界も我々の世界も通じているものなのだなと感じました。



原画と緞帳と関係者一同

■大阪芸術大学芸術劇場でのお披露目式典を開催

夏休みが明け、9月17日に「学校法人塚本学院 80 周年記念 大阪芸術大学芸術劇場 新緞帳『STAR』お披露目式」が開催されました。

会場である芸術劇場の客席に学生や関係者が集い、祝賀ムードに包まれました。

式典ではオープニングアクトとして舞台芸術学科の学生がリズム＆ブルースの楽曲「続く夏のブルース」を伸びやかな歌声で披露。

その流れで新緞帳のお披露目がコールされました。新緞帳が降ろされると、会場からは大きな歓声が沸き起こりました。



舞台芸術学科公演「夏町」より「続く夏のブルース」を披露

続いて塚本英邦副学長が「村居先生は美術界のトップ集団である芸術院の会員です。そういう方が大阪芸術大学におられ、その先生の作品が、芸術劇場の緞帳になりました。どうかここからみなさんがスターになることを祈っています」と挨拶。

山本健翔舞台芸術学科長も「古代ギリシャの円形劇場はあらゆるものの中心になっていた場所です。そんな象徴的な緞帳を作っていただいた。緞帳は劇場の顔です。この緞帳とともにここからみなさんが羽ばたいて、輝いていただければと思います」とエールを送りました。

また、登壇した村居正之美術学科長に青色へのこだわりを聞くと「日本画で使う群青の絵の具は古代から使われているものです。それは今回の原画に使われているものと同じで、2000 年前から今に繋がっています。今回は川島織物セルコンさんに、その色を表現するため色の魅力などをお話してお手伝いいただきました」と語られました。



和やかに進行するお披露目式。右・山本学科長と左・村居学科長

プログラムの最後には堀内充教授が今回のために振り付けた新作バレエ「ローザス」が祝舞として奉納されました。深紅の衣装を纏った 13 名の舞踊コース学生一人ひとりがローズ=バラになって、新緞帳を囲むイメージで新たな劇場のスタートを彩りました。



ローザス



堀内教授と舞踊コース 13 名のダンサー。
新作バレエ「ローザス」はこの緞帳に捧げられた

<山本健翔舞台芸術学科長>

村居先生が日本画で描く古代ギリシャの世界、そこにあるのは我々舞台芸術の源である円形劇場。このテーマの取り合わせが素晴らしいと思います。そして「STAR」というタイトルには、学生たちがスターになってほしいという願いとともに、古代から今まで光を放ち続けている星々から、「一瞬を永遠に」「永遠を一瞬に」とらえる芸術のありようが示されています。

今までにない貴重なブルーといい、星の輝きの際立ち方といいこんな作品は他にはありません。“アートの冒険”という大阪芸術大学ならではの取り組みであると思います。原画の「青」がまさに多くの力によって織りなされていくという、協働によってもたらされる舞台芸術の根本とも繋がっているし、色々な意味で象徴的な緞帳ができたことを本当にうれしく思います。

緞帳は幕があがって、その向こう側で演目が行われるものだけれども、この緞帳の前で何かをしたくなるような創作意欲もかきたてられますね。私にはすでに演目のアイデアが浮かんでいます。堀内充教授振付の「ローザス」も、緞帳の青と衣装の赤とのコントラストなど、とても素晴らしいものでした。作品と緞帳が渾然一体となった、いいお披露目会だったと思います。この緞帳をいただいて、学生たちとともに私たちもまた新たな舞台芸術の地平に進んでいきます。「STAR」の向こうから、いわゆるスターを超えて、個々がそれぞれ自ら輝く存在になって飛び出してほしいですね。